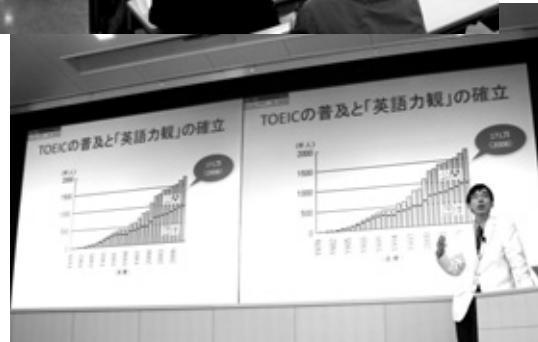


# TOEIC® Newsletter

## 特集 シンポジウム 大学英語教育とTOEIC®テスト —どう使うかどう活かすか—

(財)国際ビジネスコミュニケーション協会では、2010年3月21日、キャンパスプラザ京都において、神戸大学石川慎一郎研究室と共催で、シンポジウム「大学英語教育とTOEICテスト—どう使うかどう活かすか—」を開催いたしました。

当日は、石川先生を中心とする研究グループによるプロジェクト「英語4技能直接測定の意義と課題」の成果発表や、TOEICスコアを取り入れた教育プログラムで成果を出している大学の事例発表などが行われました。今号では、同シンポジウムにおける研究プロジェクト成果発表と招待発表事例をダイジェストでご紹介します。



### CONTENTS

#### 特集

#### シンポジウム

#### 「大学英語教育とTOEICテスト—どう使うかどう活かすか—」

##### <研究プロジェクト成果発表>

石川慎一郎先生(神戸大学) ..... 3

石川有香先生(名古屋工業大学) ..... 6

小泉利恵先生(常磐大学) ..... 8

##### <招待発表>

伊東田恵先生(豊田工業大学) ..... 10

前田啓朗先生(広島大学) ..... 12

植松茂男先生(摂南大学) ..... 14

##### <IIBCプレゼンテーション>

(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 R&D部 三橋峰夫 ..... 16

[Information] From TOEIC ..... 19

TOEICスピーキングテスト/ライティングテスト(以下、TOEIC SWテスト)の開始によって、TOEICプログラムはリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの4技能を直接測定することが可能となりました。しかし、4技能直接測定の意義や結果の解釈などについての研究の蓄積はいまだ充分とは言えない状況にあります。そこで、神戸大学石川慎一郎研究室と(財)国際ビジネスコミュニケーション協会(以下、IIBC)では、研究プロジェクト「英語4技能直接測定の意義と課題」を立ち上げ、大学英語教育における効果的な外部テストの活用法などについて検討を行うことを目指し、研究を進めてきました。

本プロジェクトの一環として、2010年3月21日には研究成果発表を含むシンポジウム「大学英語教育とTOEICテスト— どう使うかどう活かすか —」が開催されました。

シンポジウムは、午前・午後の2部構成となっており、午前の部では公募により審査を経て選ばれた5大学の発表が、午後の部では研究プロジェクトチームによる研究成果発表、招待発表(3大学)、IIBCによるテスト活用についてのプレゼンテーションが行われ、学習者の英語力の評価や外部テストの効果的活用を考える上で有益な知見が提供されました。

今号では、午後の部にて行われた発表内容をダイジェストでご紹介します。

## プログラム

## 午前の部

開会の辞

## ■研究・実践発表

<学習者論・テスト論関係> 司会：西納春雄(同志社大学)

授業外での英語学習の効果：TOEICスコアの変化から  
磯田貴道・田頭憲二(広島大学)

Factor structure of the renewed TOEIC test  
印南洋(豊橋技術科学大学)

<大学カリキュラム改革関連> 司会：加藤雅之(神戸大学)

工学系大学院英語授業でのTOEICテスト利用実践報告  
川口恵子・山崎敦子(芝浦工業大学)

TOEIC導入後の課題と英語プログラム改革  
吉田弘子(大阪経済大学)

シーボルト英語プログラムの成果と課題  
上村俊彦(長崎県立大学)

## 午後の部

## ■IIBCプレゼンテーション

大学英語教育でのTOEICテスト活用—テスト特性の再考—  
(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 R&D部 三橋峰夫

## ■研究プロジェクト成果発表

「英語4技能直接測定の意義と課題」  
石川慎一郎(神戸大学)  
石川有香(名古屋工業大学)  
小泉利恵(常磐大学)

## ■招待発表

豊田工業大学におけるTOEICスコアの活用—国際的技術者・研究者の育成を目指して—  
伊東田恵(豊田工業大学)

広島大学におけるTOEICテスト活用：到達目標に準拠した評価への実践  
前田啓朗(広島大学)

TOEIC900点以上、英検1級合格を可能にする英語教育：摂南大学のケース  
植松茂男(摂南大学)

閉会の辞

# 日本人英語学習者の目標言語能力特性： 4技能の直接測定が示すこと

石川慎一郎先生 (神戸大学)

## 4技能直接測定の意義や課題を考える 研究プロジェクトを実施

TOEICテストは日本の大学の英語教育に広く普及しています。大学生を含めた日本でのTOEICテストの受験者数は年間170万人にのぼります。これに伴い、例えば、就職活動などの場面において、TOEICテストのリスニングセクションとリーディングセクションの合計スコアで自分の英語力を示すということも一般的になりました。

TOEICテスト（以下、LRテスト）は、リスニングとリーディングの能力測定によって間接的にスピーキングとライティングの能力も測っているとされます。しかし、2007年にTOEIC SWテスト（以下、SWテスト）が導入され、4技能を直接測定することが可能になったことで、逆に、教育現場ではいくつかの疑問も生じてきたように思われます。例えば下記のような疑問です。

- 1) 「LRだけで4技能」なら、SWは不要では？
- 2) LR合計点は本当に4技能総合力を表しているのか？
- 3) カリキュラムにおいて、4技能をRLとSWに分けると、RWとLSに分けるのでは、いずれがより近い能力をまとめているのか？
- 4) 4技能のうち一番難しいのは？
- 5) 習熟度によって難しい技能は変わるのか？
- 6) 4技能のうち仮に1つの技能だけで全体をある程度予測するならどの技能がよいか？

4技能の直接測定はさまざまな評価的・教育的意義をもつと考えられますが、なぜ4技能を直接測定すべきなのか、どのような場合にスピーキングやライティングの直接測定が有効なのかといった点については、テスト研究の分野においても、あるいは英語教育学の分野でも、いまだ研究の蓄積が充分とは言えません。



こうした状況を踏まえ、私の研究室とIIBCでは、2009年4月に「英語4技能直接測定の意義と課題」という研究プロジェクトを立ち上げました。本日はこの研究成果の一部についてご報告いたします。

## 大学生108人のTOEICスコアと TOEIC SWスコアを基に分析

本研究で具体的に明らかにしようとするリサーチエスチョン（RQ）は下記の4点です。

- RQ 1. 4技能テストのうち難度・弁別力が高いものはどれか？
- RQ 2. 4技能テスト得点はどの程度相関しているか？
- RQ 3. 4技能テスト得点は総合力とどの程度関係しているか？
- RQ 4. 4技能テストのうち各習熟度群に適したテストはどれか？

研究の方法ですが、研究協力者は関西圏・中部圏の2つの国立大学に在籍する日本人学生（大学院生含）108人です。男女比はほぼ5：5、所属する学部・研究科は文系43%、理系57%です。募集にあたっては、幅広い学力層を代表するデータサンプルを作るため、特定レベルの学習者が偏らないように調整しました。

研究協力者はLRテストとSWテストの両方を受験しています。受験間隔は6カ月以内とし、80%が1カ月以内に両テストを受験しました。研究協力者のLRテスト合計スコアは平均621.9点です。

研究協力者には作文課題・心理アンケート・語彙力テストなども併せて実施していますが、この結果については、後ほど2名の先生が発表されます。

なお、分析において留意しておくべきことが2つあります。1つ目はスコアの性質の問題、2つ目は技能テストの独立性についてです。

前者に関して言うと、LRテストは集団基準テスト (norm-referenced test) であって、その得点は一定の分布における受験者の位置を示しています。一方、SWテストは目標基準準拠テスト (criterion-based test) ですので、得点は実行可能な言語技能を示しています。つまり、本来はLRテストとSWテストの得点の性質は異なることになりませんが、本研究ではともに同様の数量データとして扱います。

後者に関してですが、一般に4技能テストという言い方をしますが、実際上、LRテストではリスニングセクションとリーディングセクションを別個に受験することはできません。しかしながら、ここでは、相互比較の必要性から、便宜的にリスニングテスト、リーディングテストと呼び、4種類の技能別テストがあるとして以後の議論を進めていきます。

分析手法ですが、RQ 1 (難度・弁別力) では、4つのテストの最高スコアが異なるため100点満点に換算します。その後、難度を示す平均点や、弁別力を示す標準偏差を求めました。

RQ 2 (相関) では4つの得点に対してピアソンの積率相関分析を行い、組み合わせごとに相関係数を算出し、係数の有意性検定を行いました。

RQ 3 (総合力との相関) では、主成分分析により、4つのテストスコアから4技能の総合力基準値となる第1主成分スコアを算出し、各技能テストスコアやLRテスト合計点、SWテスト合計点と総合基準値との相関を検討しました。

RQ 4 (習熟度) では、RQ 3で算出した第1主成分スコアに基づき研究協力者を上位・中位・下位の3群に分類した後、各群において4技能テストの弁別力や総合力基準値との相関を比較しました。

## TOEICテスト、TOEIC SWテストともに4技能総合力と高い相関を示す

結果と考察です。

### 【RQ 1】(難度・弁別力)

難度ですが、調整得点の平均値は高い方からライティング (67.18)、リスニング (64.86)、リーディング (60.77)、スピーキング (54.68) の順となっています。一般に、4技能の中で大学での指導が特に不足しているのはスピーキングとライティングですが、2つのスコアが対照的な得点状況を示したことは興味深い点です。

次に弁別力ですが、得点のばらつきの大きさを標準偏差で見たところ、数値が高い順にリスニング (15.34)、リーディング (14.62)、スピーキング (13.47)、ライティング (12.9) でした。問題数の多いLRテストの弁別力がSWテストより高いことは自然な結果ですが、とりわけリスニングテストの標準偏差が高かったことは、リスニングテストが学習者を細かくレベル分けするものであることを示しています。

まとめますと、4技能テストのうち、難度が高いのはスピーキング、弁別度が高いのはリスニングということになります。

### 【RQ 2】(相関)

まず、4技能テスト間の相関についてですが、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングをどのように組み合わせても、0.6や0.7以上の相関が確認できました。

なお、4技能に関しては、「話し言葉技能／書き言葉技能」と、「発信技能／受信技能」という2種類の区分が一般に行われ、大学等のカリキュラムにおいてもいずれかの区分基準を採用して英語科目の性質を規定している例が多くあります。そこでこれらの相関を調べてみました。すると、「話し言葉技能」とされるリスニングとスピーキング間の相関は0.73、「書き言葉技能」であるリーディングとライティングでは0.65で、両者の平均は0.69となります。一方、「発信技能」とされるスピーキングとライティング間の相関は0.67、「受信技能」とされるリスニングとリーディングでは0.69で、両者の平均は0.68です。このことから、技能間の相関度の平均ではいずれの区分を選んでも大差ないことが分かりました。ただし、技能間の相関度をほぼ一定にしようとするなら、発信技能と受信技能で分ける分け方のほうがバランスが良いと言えそうです。

### 【RQ 3】(総合力との相関)

ここではまず、4技能スコアから主成分分析によって「4技能総合力」という値を新規に作成し、この値と各種のスコアがどの程度関係しているかを見ていきます。

最初に、LRテスト合計点、SWテスト合計点で考えてみましょう。これらと総合力の間には、ともに0.9を超えるきわめて高い係数が出ています。これにより、LRテストがリスニング、リーディングを測定することで間接的に4技能を測定しているということが妥当であると確認できました。また、SWテスト合計点も総合力と高い相関があります。

次に、各技能ごとに見ていくと、総合力との相関度はスピーキングテストが一番高く出ています。スピーキングテストはその他のテストに比べてテスト時間が短いことを考えると、スピーキングは4技能の総合力を簡便に推定するテストとなる可能性があるとと言えます。

【RQ 4】(習熟度)

今度は、学力層を上位群、中位群、下位群に分けて、平均・標準偏差・相関を順に見ていきます。

まず、群ごとの4技能テストの平均点を見てみましょう。平均点が低い、つまり、テストとしての難度が高いのは、いずれのレベルでもスピーキングです。一方、平均点が高いテストは、上位群ではリスニングが、中位群、下位群ではライティングとなっています。つまり、リスニング能力の高さが上位群の特性であることが示唆されました。

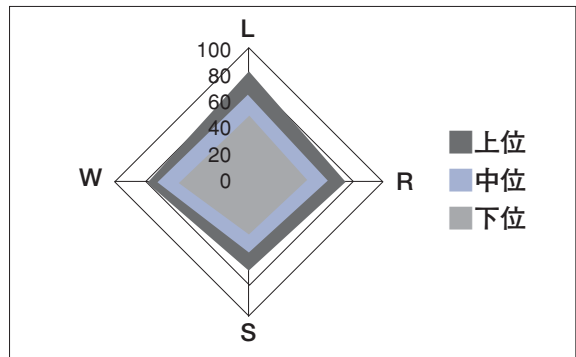
なお、一般に、4技能のスコアは凹凸なくバランスよく分布していることが望ましいと言えます。そこで、4技能テストの平均点間の開きに注目したところ、上位群では開きが小さく、中位群、下位群になるにつれて開きが拡大していることが証明されました。レーダチャートにしてみると、レベルが下がると正方形が次第に崩れてくるのが分かります【資料】。

次に、弁別力について考えてみましょう。標準偏差を比較すると、上位群ではリスニング、中位群、下位群ではライティングの弁別力が高くなっていることが分かりました。

最後に、主成分分析で得られた総合力との相関を見ていくと、上位群ではリーディングテストが最も高い相関を示していました。既に述べたように、総合力が下がると技能間のばらつきが大きくなるため、中位群以下では各技能スコアと総合力との相関は全般に下がってきますが、中位群ではリスニングテストが、下位群ではライティングテストが比較的高い相関を示していることが分かりました。

このように、全般的なL2（第二言語）の能力レベルによって、各技能テストの意味合いがかなり大きく変わってくるのが明らかになったのは、今回

【資料】習熟度別4技能レーダチャート



の研究で得られた重要な知見と言えるでしょう。

最後に、冒頭にあげた素朴な疑問に対するまとめをお話しして私の発表を終えたいと思います。

- 1') 2') LRテストだけでもかなりの精度で4技能の総合力を測れていることが確認されました。ただし、受験者の習熟度により推定精度は変動するため、可能な場合は4技能の直接測定がより望ましいと言えます。
- 3') 相関値の平均で見ると、いずれの組み合わせでも大差ありませんが、リスニングとリーディング、スピーキングとライティングをそれぞれ組み合わせた方が、能力的により近接した技能を扱えるようです。
- 4') 日本人学習者にとって、4技能で一番難しいのはスピーキングであることが分かりました。
- 5') すべての習熟度レベルにおいてスピーキングテストが最も難度が高いと思われます。また、技能間の差は上位レベルになるにつれて縮まってきます。
- 6') 仮に1つの技能で全体を簡易に推定するとすれば、上位群ではリーディング、中位群ではリスニング、下位群はライティングが有効であると思われます。

私の発表は以上です。もっとも、研究で得られたデータの量は膨大で、分析はまだ緒についたばかりです。本日の発表には、多くの制約や未解明の問題も残されていますので、今後、さらにデータの分析を進めていきたいと思っています。

また、今後の展望としては、全国の大学の先生方と連携を図りつつ、より多くのデータを集めて共同で分析していくような研究プロジェクトの立ち上げができれば、と考えています。ご清聴ありがとうございました。

研究プロジェクト成果発表 「英語4技能直接測定の意義と課題」

# Vocabulary Size Testから 予測できるもの —TOEIC®テストとの相関—

石川有香先生（名古屋工業大学）

## 4技能と語彙力の関係をTOEICテスト、 TOEIC SWテスト、VSTを用いて分析

英語の学力には、語彙、文法、音韻、さらには、つながりのあるまとまった文章を作成するためのディスコースに関する能力など、さまざまな種類の能力が含まれていると考えられます。こうした学力を測定する方法はいくつかありますが、その中から、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの4つの技能を個別に測っていく方法を取り上げます。

英語のコミュニケーション活動を行う際には、これら4技能のすべてにおいて語彙知識が関わってきます。そこで、本研究では、英語学習者の語彙力と4技能の関係を探ることを目的としました。

調査にあたり、語彙力の測定にはPaul Nation氏が開発したVocabulary Size Test（以下、VST）を使用しました。4技能の測定にはTOEICテスト（リスニング、リーディング）、TOEIC SWテスト（スピーキング、ライティング）を用いました。これらのテストは先行研究において信頼性が高いことが示されており、こうしたテストを用いて研究を行うことは一定の意義があると考えられます。また、TOEICテスト、TOEIC SWテストで測定した結果が、VSTである程度予測できるとすれば、実際の教室内での指導に直接的に役立てることができるとも言えましょう。

リサーチクエスションは次の3点です。

- RQ 1. VSTのスコアは、TOEICの4つのスコアをそれぞれどの程度予測できるか。
- RQ 2. TOEICの4つのスコアのうち、VSTが最もよく予測できるものはどれか。
- RQ 3. VSTスコアの上位・中位・下位群で、TOEICの各テストの予測力に差があるか。



テストの方法には、単語や文法など個別に項目を設定して測定する部分測定法と、インタビューなどで総合的な能力を測定する統合測定法がありますが、これらは1つの連続体をなしていると考えられます。タスク準拠の評価を行った先行研究からも、個別の能力である語彙力がタスク遂行に必要な能力であることが明らかにされています。

こうした先行研究を踏まえて、本研究では、4つの技能はどれも語彙力を共通因子としてもっているというモデルを考えます【資料】。ここで、VSTは、書かれた刺激に対して答えていく視認テストですので、特にリーディングとの相関が高いのではないかという予測がなされます。

今回の調査で用いたVSTは、長年使用されてきたVocabulary Levels Test（以下、VLT）の改良版ですが、確かに、VLTを使用した先行研究では、読解テストとの高い相関が出ているという報告があります。また、日本人学習者に対する調査ではVLTとTOEFLでも高い相関が出ています。特に3,000語以上の語彙力があると読解力との相関が高まるとの報告もあり、3,000語を超えることが読解力育成のためのターニングポイントとなる可能性が示唆されています。今回の調査でも確認したいと思います。

本研究の方法ですが、研究対象者は前述のとおりです（P 3～4 参照）。語彙力については14段階

#### 【資料】4技能と語彙力



あるVSTのうち、1,000語レベルの第1段階から5,000語レベルの第5段階までの問題のみを使用しました。これは、先行研究に基づき、日本人の大学生の平均スコアでは第6段階以上のテストはあまり有効ではないと判断したためです。

使用した問題は50問で、辞書の使用は不可としました。テストの制限時間はありますが、あまり深く考えずに素早く答えるように指導しています。VSTはもともと4肢択一の形式ですが、当てずっぽうでの回答を避けるため、選択肢番号「0」を設け、分からない場合は「0」を記入させるようにし、より正確な測定を目指しました。

ただ、選択肢「0」を設けたことで、おそらくは「知っている」と思われる語であっても、定義に少しでも不安を感じた場合には「0」を記入する研究協力者も出てきました。したがって、TOEICスコアの高得点保持者が多くの中学生レベルの語彙に対して「0」を記入していた場合など、明らかに不自然だと思われるデータは、外れ値として分析対象から外しました。その結果、103件のデータが分析対象となりました。

#### 語彙力がスピーキング、ライティングのスコアアップに必要となる

結果と考察です。

##### 【RQ 1】

VSTスコアとTOEICの4つのスコアのそれぞれの相関を見ると、リスニングとリーディングよりも、むしろスピーキングとライティングが高めに出ています。特に、VSTはスピーキングとの相関が最も高いことが分かります。ただ、VSTを手掛かりとして回帰分析を行った場合、VSTからTOEICのテストの各スコアの予測はあまりうまく働きません。予測式の当てはまり具合を示す決定係数は、スピーキングテストとの間で最も高い0.31を示していますが、最も低いリスニングテストでは0.21となっています。すなわち、VSTからだけではTOEICの4つのテストの結果をうまく予測することはできない

と言えそうです。

##### 【RQ 2】

VSTからTOEICの4つのテストスコアを予測すると、全般的に予測力が低くなるものの、その中ではTOEICのスピーキングスコアが、最もよく予測ができているということが分かりました。VSTは、問題を読んで選択肢の中から回答を選んでいくテストであるため、先行研究では「読んで、理解する」リーディング活動との関係が深いと考えられがちでした。そのため、これまではVSTを手掛かりにした場合は、主にリーディングテストとの予測研究に使用されることが多かったのですが、本研究では、むしろスピーキングスコアの予測に向いていることが分かりました。VSTテストとスピーキングスコアの相関は、0.55となっていますので、単語をたくさん知っている人は、スピーキングテストで高いスコアをとる傾向があると言えます。

##### 【RQ 3】

語彙力によってTOEICの4つのテストスコアの予測力に差があるかどうかを見るために、VSTのスコアを基準に上位・中位・下位群の3群に分けてみました。

各群による分布を見てみると、まず、発信能力を測定するスピーキングとライティングの両方において、散らばりに偏りが見られます。RQ 1やRQ 2で示した回帰直線よりも、下位群では下に位置するケースが多く、また、上位群では上に位置するケースが多くなっていることが分かります。

また、同様の傾向が、やや弱いながらも、リスニングにも見て取れます。やはり、語彙テストのスコアが低い場合には、回帰直線よりも下へ、高い場合には、上に寄っています。

このように下位群と上位群で偏りが見られることから、特にスピーキングとライティングにおいては、3,000語～3,500語あたりにターニングポイントが存在する可能性が高いことが確認できました。

最後に本研究をまとめると、語彙力は、従来注目されてきたリーディングのスコアよりも、スピーキングやライティングとの結びつきが強く、スピーキングやライティングでスコアを伸ばすには、幅広い語彙の知識を得ることが鍵であると言えます。VSTが測っているとされる、受容語彙の「広さ」の知識が、実はスピーキングやライティングといった発信能力を支えている可能性があります。

今後は、VSTの項目別の調査をさらに進めたいと考えています。

研究プロジェクト成果発表 「英語4技能直接測定の意義と課題」

# TOEIC®テストにおける 4技能の高さのギャップ： 学習者のグループ化と予測要因

小泉利恵先生（常磐大学）

## TOEICテストとTOEIC SWテストの スコアを用いて技能差を分析

日本人英語学習者は4技能の中でスピーキングが苦手であると言われていています。実際、2008年のTOEFL iBTの結果を見ると、日本人受験者のスピーキングのスコアは161カ国中159位となっています（他の2国も同点のため最下位）。リーディングは107位、リスニング124位、ライティング130位です。TOEFLスコアだけで日本人英語学習者一般を論じるのは難しいですが、スピーキングは他の技能に比べて低いレベルにあるとは言えそうです。

一方、それは全体的な傾向であり、細かく見れば個人差があるのではないかと、4技能が同じようにできる人や、別のパターンの人がいるのではないかと、素朴な疑問も起こってきます。

そこで、本研究では学習者における4技能の高さのギャップ（技能の差）に注目しました。

技能の高さのギャップの観点から学習者がどのようなグループに分けられるのかを調べることは、学習者をよりよく知ることにつながり、今後の指導や評価に役立つ情報が得られる可能性があります。また、その技能差はどのような要因によって起きるかも重要な観点です。習熟度以外にも、性格、動機付け、不安、コミュニケーションへの意欲、学習スタイル、学習ストラテジーなどの個人差の要因があると考えられます。

これらを踏まえ、本研究では、TOEICテストとTOEIC SWテストの4技能スコアを用いて、日本人大学生・大学院生の技能差によるグループ化を行い、その違いを生み出す要因は何かを特定することに取り組みました。

リサーチクエスチョンは次の2点です。



RQ 1. 4技能の高さのギャップ（技能差）のパターンに基づき、学習者はどのようなグループに分けられるか

RQ 2. 技能差に基づいたグループ分けを、性格・動機付け・不安・英語学習経験・英語使用頻度の要因で予測できるか。

研究対象者は、P 3～4の108人のうち、本研究の分析に使用したアンケート項目のすべてに答えた106人を対象としました。アンケートはTOEICテスト、TOEIC SWテストとは別に、学習者の性格、動機付け、不安、学習経験について、「6：よくあてはまる」から「1：まったくあてはまらない」までの6つの選択肢を使って行っています。

分析方法ですが、RQ 1は、IBCが公表しているTOEICテストのスコア区分を参考に、リスニングスコアとリーディングスコアを5段階に分け、さらに、TOEICスコアとTOEIC SWテストのスコア比較表を用いて、スピーキングスコアとライティングスコアを同じく5つに分けました【資料1】。そうして作成した4技能スコアのレベル表を用いて、「この学生のリスニングはレベル3、リーディングはレベ

【資料1】4技能スコアのレベル分け

Level (LR)	L	R	S	W
5(860~990)	430~495	430~495	150~200	160~200
4(730~860)	365~430	365~430	130~150	140~160
3(470~730)	235~365	235~365	100~130	100~140
2(220~470)	110~235	110~235	70~100	70~100
1(5~220)	5~110	5~110	0~70	0~70

※各レベルのスコア範囲は、例えば、「A~B」の場合は「A以上B未満」を示す。

ル4」というように1~5のレベルに変換し、各技能間の差を算出しました。その後、クラスター分析を用いて、技能間の差のパターンによって受験者をグループ分けしました。

RQ2については、探索的因子分析によって抽出した予測要因から参加者がどのグループに入るかを予測できるかどうか判別分析を行いました。

#### 4技能を測定し、技能差の観点から学習者をグループ分けすることが可能

結果と考察です。

##### 【RQ1】

クラスター分析では、どこで区切るかが問題になってきますが、解釈が可能なグループ分けを吟味し、4つに分けるのが妥当と判断しました。

グループ1は、4技能が同じ程度にできる群です。技能間の差を算出してみると、「(リスニング)-(リーディング)」が0.04、「(リスニング)-(スピーキング)」が0.25となるのをはじめ、4技能がほぼ似たレベルにあります【資料2】。

グループ2は、3技能と比べてリーディングが苦手な群です。「(リーディング)-(スピーキング)」の数値が-1.13と下がっており、リーディングが苦手であることが見てとれます。

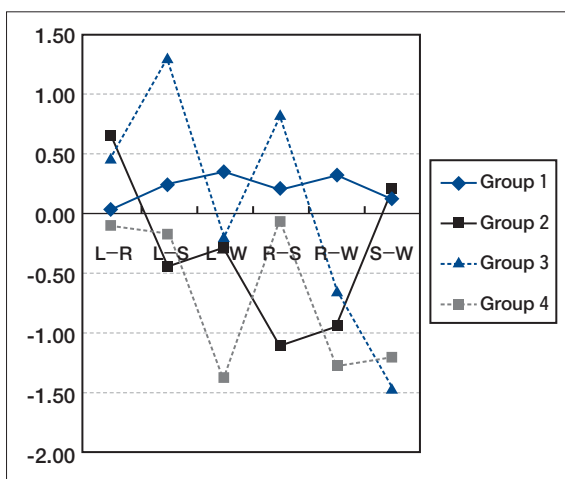
グループ3は、3技能と比べてスピーキングが苦手な群です。

グループ4は、3技能と比べてライティングが得意な群です。

##### 【RQ2】

まず探索的因子分析を行って、心理尺度項目と英語学習経験を問う項目の因子を抽出しました。

【資料2】クラスター(グループ)ごとの技能差の平均値のプロット



性格・動機付け・不安についての心理尺度の項目の因子数は7つに決定しました。①内発的動機付け、②情緒安定性、③外発的動機付け、④良識性・知的好奇心、⑤外向性、⑥不安、⑦協調性です。

英語学習経験では4つの因子を使用しました。①大学の授業での学習、②中学・高校の授業での学習、③大学の授業外での学習、④スピーキング・ライティングの授業を受けた経験です。

次に、探索的因子分析により得られた7つの因子、4つの因子の因子得点と、「日常生活で英語を使用する頻度」とを併せて判別分析で用いました。その結果ですが、残念ながら十分予測できる数値は得られませんでした。グループ分けが悪かったのではないかと考え、クラスター分析をする前の素点を用いても分析を行いました。十分な結果は出ませんでした。

最後にまとめますと、「学習者をパターン化できるのではないか」という研究前にもっていた疑問に対しては、4技能の高さのギャップの観点から学習者を分類できることが示されました。4技能の能力はTOEICテストとTOEIC SWテストの両方を受けることで測定可能ですので、4技能のバランスを見るためにも、両テストをともに受ける意義は大きいと思われます。

今回の研究では、技能差を生み出す要因を特定することはできませんでした。しかし、今後、技能差のある学習者とない学習者をさまざまな観点から観察し、分析していくことで、その要因を特定し、学習者へアドバイスを与える際に役立つ知見が得られる可能性はあると考えます。

招待発表

# 豊田工業大学における TOEIC®スコアの活用 — 国際的技術者・研究者の育成を目指して—

伊東田恵先生 (豊田工業大学)

## JABEE認定などを契機にTOEICスコアを 卒業・進級・履修要件に活用

本学は、トヨタ自動車株式会社の社会貢献活動の一環として1981年に設置されました。1学部1学科の工業系単科大学で、学部生の入学定員は80人です。修士課程・博士課程を含めても全学生400人程度と、少人数制教育を特色としています。卒業生への評価は高く、就職率100%を誇ります。

本学では、教育目標に「基礎を重視した分野横断型の教育と体験的教育を行うことにより、社会人としての基礎力と国際的な視野を持ち、多様な課題に挑戦し克服できる学識と創造性を備えた技術者・研究者の育成」を掲げています。これを基に、学部から修士の6年一貫の教育を重視し、工学分野で世界共通語となっている英語の教育にも力を入れています。2003年9月には米国シカゴ大学内に豊田工業大学シカゴ校 (TTI-C) を開設しました。

TOEICテストを導入したのは2003年度からです。当初は年1回全学生を対象に行い、1年間の到達度を測定していました。そして、2005年度からはスコアを卒業・進級・履修の要件として活用し始めました。現在は、テストの実施回数も増やし、入学時のプレースメントテストと、年2回前期と後期の終わりにTOEICテストを実施しています。

TOEICテストをカリキュラムと連動させて導入するきっかけとなった理由は2つあります。

1つは2005年にJABEE (日本技術者教育認定機構)\*認定を受けたことです。この認定では、「国際的に通用するコミュニケーション基礎力」について、修了者が一定の水準を超えていることをプログラム側が証明することが求められます。



2つ目は、平成18年度文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブに、本学大学院の「専門英語の積極的導入による先端的工学教育」が採択されたことです。

これらを背景に教育の質の保証の一環としてTOEICスコアを教育課程に全面的に導入したほか、オンライン遠隔教育、学生・教員海外研修の実施、ダブル・ディグリー制度、理工英語教育、海外大学との連携などを整備しました。

現在、英語教育は一般英語教育と専門 (理工) 英語教育の2つを設けています【資料】。専門英語教育は、従来3年次後期に配されていた「工学英語」を専門英語への入門の科目 (「理工英語入門」) として1年次に移行し、工学専門の教員が学部1年次より専門英語を教育する新しい英語カリキュラムを2008年度からスタートさせました。1年次の「理工英語入門1・2」では語彙と基礎的コミュニケーションを中心に指導し、2年次の「理工英語1・2」ではプレゼンテーション、3年次の「理工英語3・4」は、ライティングを中心に指導しています。また、3、4年次に「英語科学技術論文

入門1・2」を設け、修士1、2年次では「科学技術英語1・2」として「国際会議等における英語でのディスカッション、海外学会誌等への英文論文の投稿など国際的な研究活動を支障なく行える」ことを目標とした指導をしています。理工英語関連の科目は工学専門教員とネイティブスピーカー（資料中はNSと表記）が担当し、2009年度の「理工英語入門」では、チームティーチングも行われました。

一般英語の方は、1、2年次で「教養英語」、3年次で「検定英語」を設けています。「教養英語」ではリーディング、リスニング、文法を中心に英語の総合力の向上を目標としています。そして、就職活動が関わってくる3年で「検定英語」を開講し、TOEICまたはTOEFLの受験準備をします。

授業は1クラス25人前後で、1～3年までは4段階の習熟度別クラス編成をしています。

本学の英語教育におけるTOEICスコアの活用ですが、まず4年次進級要件に350点を設定して、学部の卒業要件を400点としています。ただし、JABEEに対応した専修プログラムは450点であり、大学院の修了要件は500点です。JABEEの専修プログラムは3年次に選択するようしており、履修要件として2年次修了時まで400点取得を設けています。また、「英語特別演習」は550点以上取得していることを履修要件とする選択科目です。

TOEICスコアは単位認定にも活用しているほか、1、2年次の英語科目（「英語特別演習」を除く）では成績評価にスコアを20%組み入れています。

### TOEICテストを教育課程に全面導入以降 学生の英語力が向上

2009年度入学生の入学時のTOEICテストの結果は、平均413点、最高730点でした。

入学時のスコアの平均は2003年度の導入初期から現在まで大きな変化はなく400点前後です。しかし、入学後のスコアは、全面的に教育課程に導入以降、伸びが顕著となっています。

TOEICテストを到達度テストとしてのみ使用していた2003～2005年度入学生の場合、2年次終了までで平均47点の上昇でしたが、スコアを成績評価に20%組み入れた2007年度生は2年間で平均82点の伸びを示しました。3年間では平均155点上昇しています。

【資料】英語カリキュラムの概要（新旧対比表）

		一般英語 (変更なし、旧カリを継続)	一般英語 (一般英語の一部を専門英語へ変更)	専門(理工)英語
学部				
入学時	プレシメントテスト(TOEIC®)			
1年次	選択 各1単位	教養英語1,2 (英語教員)	スピーキング1,2 (NS教員)	理工英語入門1,2 (工学専門教員/NS教員)
2年次		教養英語3,4 (英語教員)	プレゼンテーション1,2 (NS教員)	理工英語1,2 (NS教員)
3年次		検定英語1,2 (英語教員)	アカデミックライティング1,2 (NS教員)	理工英語3,4 (NS教員)
			工学英語1 (工学専門教員)	英語科学技術論文入門1 (工学専門教員)
4年次	4年次進級要件	TOEIC® 350点	工学英語2 (工学専門教員)	英語科学技術論文入門2 (工学専門教員)
2年次	選択 各1単位		英語特別演習1,2(NS教員、TOEIC® 550点以上取得者対象)	
1年次	選択 2単位		学部海外特別演習(アリゾナ大学における英語研修と工学実験)	
4年次	卒業要件	専修プログラム(JABEE対応): TOEIC® 450点 総合プログラム: TOEIC® 400点		
大学院	必修 各1単位		理工英語1 (工学専門教員)	科学技術英語1 (工学専門教員/NS教員)
			理工英語2 (工学専門教員)	科学技術英語2 (工学専門教員/NS教員)
	選択 2単位		修士海外特別演習(アリゾナ大学における英語研修と工学実験)	
	大学院修了要件	TOEIC® 500点		

※外国語科目12単位のうち英語科目10単位以上が卒業要件。第2外国語としてドイツ語が履修可能。

TOEICスコア活用の効果ですが、成績評価の一部にスコアを利用する効果は、動機づけに有効であることです。テスト受験の欠席者が減り、成績評価への導入以前と比較するとスコアも伸びています。学生からもTOEICの得点を伸ばしたいという積極的な声が聞かれるようになりました。

卒業・修了要件とする効果は、英語力の底上げが図れることが挙げられます。教育の質の保証ができます。しかし、専門科目の成績が優秀であっても卒業・修了できない可能性があることを留意しなければなりません。また、卒業要件を満たした後、スコアの伸びが鈍化してしまう学生も見られます。

この問題解決に向けて、卒業要件を満たしていない学生のサポートとして、3年の後期に週2回、外部教育機関が実施する「TOEIC特訓コース」を無料で提供しています。また、英語学習を奨励するため英語科学技術スピーチコンテストを行ったたり、海外研修プログラム、海外インターンシップなどを設けています。

本学では、英語教員と工学専門教員が一丸となって学生の英語力向上に取り組んでいます。今後はさらに教員間の連携を密にとり、改善を続けていきたいと考えています。

※JABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education) : 大学や高等専門学校などの高等教育機関が提供する教育プログラムが国際的な水準を満たしているかなどを審査し、認定を与える機関。

## 招待発表

# 広島大学におけるTOEIC®テスト活用： 到達目標に準拠した評価への実践

前田啓朗先生（広島大学）

## TOEICスコアを授業評価との比較や 成績評価などに活用

本日は、本学の英語教育におけるTOEICテストの活用の方法と、TOEICテストなどにまつわる多様な議論に対しての私見を中心にお話いたします。

テストの活用方法ですが、多くの大学にいていわゆる授業評価アンケートを行っていると思いますが、広島大学ではその結果の解釈に、当該クラスのTOEICスコアを加味しています。学生の授業評価に英語力を加えて検討することで、同程度の英語力の他のクラスとの比較や、同程度の授業評価の他のクラスと比較ができ、授業を改善するための情報を豊かにできます。

例えば、17項目について4段階評価された満足度の平均値をクラスごとに出し、それとTOEICの平均スコアを比較してみると、必ずしも相関が見られるとは限りません。話すことを中心とした1年次のIAという科目を例にとると、全クラス中2番目に満足度が高いクラスのTOEIC平均スコアは400点未満です。反対に平均スコアが600点以上であっても、授業満足度はそれほど高くないクラスもあります。つまり、「英語ができる・できない」ということと授業に対する満足度にはあまり相関がないことが、ここから見えてきます。

同様に、教員の母語（日本語・英語）、教室の違い（通常教室とCALL教室）と授業評価を比較しても相関はありません。やはり履修者の満足に関連するのは、教員という要因が大きいようです。

単に「授業評価が低いですよ」というだけでは見えない部分も多いのですが、TOEICのデータなどを絡めることで解釈を広げることができるので



す。教員は長期的に実力をつけさせるのは当然のことですが、問題意識をもち、各授業という短期的な場面における履修者の満足という意味での質的向上も図る必要があるでしょう。

TOEICスコアは、習熟度別クラス編成にも用いています。スコアの降順によってシンプルに区切ってクラスを編成しています。

テストは教養教育の主たる実施期間である1・2年次の前期・後期に合計4回実施し、学期末成績評価にそのスコアを使用できるようにしています。シラバスにはスコアを評価の目安として使うことを明記していますので、明らかに不真面目な受験も減少しています。履修者のスコアは各クラス担当者にもフィードバックし、学生の英語力を評価する助けとなるようにしています。また、一部の学部やクラスにおいては、授業でのパフォーマンスに基づく評価を行うとともに、当該学期のTOEICスコアでも評価を行い、両者を総括して最終的な成績評価としています。そうすることで習熟度別クラス編成に伴う成績評価の不公平感やクラス間の成績評価のばらつきを軽減できるほか、

TOEICスコアで測定できると考えられる部分はTOEICスコアを用いることで、授業内においてはその他の手段で評価を行う余裕ができています。

### 目標に準拠した評価を行うために 確認しておきたいこと

学内でも学外でも、TOEICテストにまつわる英語教育に関する議論は尽きません。その中で、あまり望ましいとは思えない議論に対する私見をいくつかお話ししたいと思います。

よくあるご意見（以下Q）：「英語力がどうでも、頑張った学生に対しては、その努力や伸びを成績評価に反映すべきだ」

私の答え（以下A）：どれだけTOEICスコアが伸びたかで成績評価をされるというお考えもあるでしょう。しかし、シラバスに「入学時のスコアから何割程度伸びること」と書いてあるのでしょうか。同じ授業科目で同じ大学の単位である限り、各人共通の目標に準拠した評価ではなく、個々人の伸長に準拠した評価でよいのでしょうか。

Q：「大学の教育とは、そのクラスの担当教員が責任を持って、裁量して行うべきである」

A：学生がクラスを自由に選ぶ制度でないかぎり、教を乞うてやってきた自分の門弟ではありません。同一科目の多クラス展開で、同じ授業科目名で成績証明書が出るものにおいて、各担当教員の専門性や得意分野などの全面的な発揮は求められているのでしょうか。

Q：「教科書を開発して統一すればいい」

A：目先の公平感には得られると思いますが、教科書「を」教えるわけではありません。また、教科書を統一することで失われるものもあります。例えば、各教員の授業に対するコミットメントなど、軽視できない面にも留意する必要があります。

### 広島大学のTOEICテスト導入の経緯と活用

広島大学では、2004年度から全学的に「到達目標型教育」を実施しています。従来の学部・学科等に対応する概念として「主専攻プログラム」を設置して、育成したい学生像を明確にし、そのために必要な授業科目を開設した上で、個々の授業における成績評価に加えて、当該のプログラムにおける到達度を評価しています。この体制に移るにあたり、英語力の指標としてTOEICテストが導入されました。

当初、入学時、1・2・3年次終了時に実施し、習

Q：「統一テストを作ってそれで評価すればいい」

A：まず、統一テストの前に何を教えて何を評価するのかハッキリしておかなくてはなりません。指導目標と評価規準・基準が明快であることは、妥当性を確保するための前提条件です。次いで、測定がぶれないようにするには、信頼性を担保するのに耐えうる専門知識のある人員が必要になります。それらの担保を欠いた主張は、空虚です。

Q：「TOEICをやっても全然スコアが伸びないじゃないか。無駄だ」

A：TOEICは体重計と同じです。ダイエットは体重計に乗るだけでは成功しません。同じものさしで測ることができてこそ、英語力が継続的に把握できるというものでしょう。

Q：「成績評価は『到達度評価』だから、授業で扱っていない内容を含むテストはなじまない」

A：「教科書『を』教える」のですか、「教科書『で』教える」のですか。「授業で用いる教材の英語の言語材料を身につけること」だけが目的ならそうかもしれませんが、「○○○する能力」を身につけることが目的なら、むしろ教材内の言語材料だけで測定するのは矛盾するでしょう。現実には、限られたリソースで類推するほかありません。特定のテストで、実際に「○○○する能力」を類推することの何が問題なのでしょう。

Q：「あの外部テストはビジネス向けであるから、大学で活用するには不向きである」

A：ビジネス界から求められている英語力と、実際にビジネスで職務上必要となる専門用語とを混同しないようにするのが大事です。それに、成人が日常生活において、商業的な文脈にまったく関わらないことなど想像しがたいものです。

以上、TOEICテストの導入や活用を検討される上でご参考になれば幸いです。

熟度別クラス編成や自身の英語力の確認に活用していました。しかし、テストを真摯に受験するという観点からは、こうした受験目的だけでは不十分であったことや、入学時から各学年の終了時という比較的長い期間をおいた測定ではスコアの変化の要因を把握するのは困難であったことから、2008年度入学生から1・2年次の前後期にそれぞれ合計4回実施するように変更しています。そして、スコアを学期末の成績評価にも活用しています。

## 招待発表

# TOEIC®スコア900点以上、 英検1級合格を可能にする英語教育： 摂南大学のケース

植松茂男先生 (摂南大学)

## 学部改組に伴い英語教育改革に着手 TOEIC600点突破を目指す教育を実践

本学では、2005年度に国際言語文化学部を改組し、外国語学部を開設しました。それに伴い、英語専攻学生の英語力をアップするための諸改革に取り組んできました。その概要と実施結果についてTOEICスコアなどを用いてご紹介いたします。

はじめに改革前の状況ですが、教室会議が少なく、教員同士のコミュニケーションがあまりとれていない状況でした。授業は1クラス40～70人程度、多様なレベルの学生が混在している中で行われ、授業方法は教員によって異なっていました。

また、外国語教育に必要なマルチメディア機材等のインフラも貧弱で、英語関係のアクティビティも十分ではありませんでした。さらに、学生の英語力やその伸びを把握する手段としての標準化テストの活用もなされていませんでした。

これらを踏まえて、次の改革を進めました。

### ●習熟度別・少人数クラスの導入

入学時にプレイスメントテストを実施して1クラス40人以下（英会話クラスは20人以下）のレベル別クラスに編成するようにしました。

### ●語学インフラの整備

4つのCALL教室、マルチメディア機材を備えた語学ゼミ室、ドラマスタジオを作りました。

### ●英語カリキュラムの見直し

新カリキュラムでは必修科目を3年次まで設け、基本4技能をバランスよく育成するように構成しています。特に1年次では、4技能を総合的に高めることを意図したSkills Trainingを中心に据え、中高の英語の復習を意図したFreshman



EnglishやGrammarなども配置するようにしました。また、選択科目はEnglish Presentation、Drama、Topic Studies、Debateなど英語発信力の育成や、英語による授業の充実を念頭においた編成としました。Topic Studiesは、教員が自由な授業テーマを選んで英語で講義することを原則とし、「外国語学習と年齢の関係」など、多彩なテーマで3年次まで半期科目として展開しています。今後も学生や社会のニーズに対応して、テーマを変え進化し続ける「先進的」な科目ではないかと思います。

### ●授業改善の取り組み

Topic Studiesや少人数ゼミではできるだけ英語を使って教えるようにしました。クラスのレベルによっては、例えば最初は日本語7：英語3の割合から始めるなど、次第に英語の比率を増やすようにしています。また、語彙力をつけるため毎回の授業では、前回既習事項のチェックテストを実施してもらるようにしました。

### ●多読の取り組みの導入

図書館の協力も得て、専用のコーナーを設置し、

毎年「多読マラソン」を実施。学期ごとに優秀者は表彰され、賞品も授与されます。

#### ●e-learningの導入

自宅からもアクセスできるようにし、レベル別に細かく編成されたプログラムを入学前から1年次修了まで利用できるようにしています。1年次ではe-learningの進捗状況を特定英語科目の成績に30%の割合で入れるようにしました。

#### ●留学制度の充実

従来アメリカへの夏期短期海外実習中心だったのを長期留学（半年、1年）プログラムも充実させ、提携校もオーストラリア、イギリス、カナダ、ニュージーランドなどへ順次拡大していきました。さらに長期留学中は本学の授業料を免除する制度を、大学の理解により実現しました。

#### ●英語関連アクティビティの導入

ボキャブラリーコンテスト、スピーチコンテスト等を定期的開催し、イングリッシュキャンプ、イングリッシュパーティーなどの行事も充実させました。さらに、一般参加も募る英語教育フォーラム、ドラマ・中学生ワークショップなどの各種英語教育イベントも毎年開催しています。

#### ●奨励金制度の開始

TOEIC800点以上のスコア提出者には大学から10万円を授与しています。2009年度は17人が申請しました。

#### ●TOEICの恒常的導入

年2回学部で実施し、英語を専攻とする学生は受験を必須としています。スコアによって次年度の習熟度のクラスが決まる仕組みとしています。大学が主催するTOEICテストも含めると年5回受験可能な環境となっています。また、TOEICスコアによる目標値も決めました。2年進級時400点、3年進級時500点、4年進級時600点です。

---

### 習熟度別クラス、英語による授業などが英語力向上の大きな要因

---

こうした取り組みの結果、外国語学部のTOEICスコア（2008年7月・学部事務室集計）は、1年生328点（受験者数193人）、2年生392点（英語コース受験者数175人）、3年生466点（英語コース受験者数115人）、4年生602点（受験者数24人）と

なり、学年ごとに70点程度のスコアアップが見られます（※外国語学部では2年次からコース所属、4年次は希望者のみ受験）。また、2006年度入学生を追跡調査で、2009年度までの目標値を達成した人数とその平均スコアを見ると、2年次の目標スコア400点の達成者は97人で平均スコアは475点です。3年次の500点達成者は54人で平均680点、4年次の600点達成者は21人で平均775点です。多くの学生が、飛躍的な伸びを見せ、2008年度に900点台が出て、2009年12月時点の累計では、900点台4人、700点以上が62人となっています。

こうした成果の要因として、習熟度別クラス編成やクラスサイズの縮小、英語カリキュラム・学習環境の見直しが大きいのと考えられます。特に英語による授業やCALL等の学習環境改善によって、留学しなくても英語力が伸びる可能性が大いにあるのではないかと思います。加えて、マルチメディア機材を利用し、時事ニュース等のオーセンティックなコンテンツを使った授業、スタジオで体を動かして行う英語授業などが展開できることも、結果につながっていると感じています。

本学は各種大学GP等で何か特別なことをしたわけではありません。教員・スタッフが丸丸となって学生の英語力の向上に向かって努力した結果です。そのことから、教員間のコミュニケーション・コンセンサスは大切であると考えます。

また、学生の英語力を高めるには、先に述べた留学制度の充実、TOEIC等の受験義務化、e-learning等の成績評価への組み込みのほか、TOEIC奨励金や留学時の授業料軽減措置、留学先での努力を反映させる単位認定など、分かりやすいインセンティブを学生に与えることが肝要です。一方で「TOEICは体重計」という自覚をもたせ、定期的な受験させることはもちろん、普段からあらゆるジャンルのテキストを読ませることが大事です。

最後になりますが、こうした実践を通して、高校時代に英語が苦手な学生でも大学で成績を大きく伸ばすことが分かりました。いったん本気になると学び始めると、その伸び幅は驚くほどです。こうした才能開発のために、学生の能力を信じて教育することがこれからの教員の使命ではないでしょうか。大学からでも英語力が伸びることを、学生に体感させながら学ばせる工夫が英語力向上には非常に大切であると感じています。

IIBCプレゼンテーション

# 大学英語教育でのTOEIC®テスト活用 — テスト特性の再考 —

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会 R&D部 三橋峰夫

TOEICテストは毎回検証作業を行い  
常に一定のクオリティを維持

本日は、TOEICテストを有効に活用していただくために、テストの設計コンセプト、信頼性、TOEIC関連で公表されているリサーチ結果の見方などをテーマとして発表させていただきます。

TOEICテストは、日本で発案され、TOEFLなど、外国語としての英語能力試験の開発・運営団体であるEducational Testing Service (ETS) によって開発されました。このときETSに対して依頼したのは、「英語によるコミュニケーション能力を正確に測定し、その能力が専門別、職種別等でどういったレベルにあるか、また目的や目標に照らしてどのレベルに位置するか、それぞれに基準を与えるテストシステム」の開発です。さらに内容は、「初級から上級レベルまでを網羅した幅広いレンジで測定できるもの」「どこかの国に偏らず国際共通語としての英語能力を測定するもの」「結果は、受験者個人が自らの能力を評価すると共に、企業・学校で多くの重要な決定に利用できるもの」とし、実施・運営面においては、「一度に大量の受験者を受け入れることができるもの」「テスト実施に際し英語その他の専門家の手を必要としないもの」「比較的安価で簡便に実施できるもの」という要望を出しました。

これらの条件をもとに決定されたテストスペックは、リスニングとリーディングの2つのセクション構成、セクションごとに各100問、合計200問を2時間で解答する、セクションスコア5～495、トータル10～990点のスコアレンジです。

スピーキングおよびライティングに関しては、それ



らの能力を正確に評価するための訓練を受けたヒューマンレーターが不可欠となります。そうなるや一度に大量の受験者への対応が難しく、運営コストも高くなってしまいます。また、テストが開発された30年前は、企業において高度なスピーキングやライティング能力まで備えた社員に対するニーズはまだ限定的でありました。このような状況から、スピーキングおよびライティング能力をテストの中で直接測定することは行わない決定がなされました。その一方で、直接的にはリスニングとリーディングのみの構成ながら、出てきたスコアからはスピーキングおよびライティングも含めた総合的な英語能力評価ができるような設計がなされております。

ETSでは、毎回公開テストで新しいテストフォームが開発されるたびにスコアの信頼性に関する検証作業を行っており、常に一定のクオリティを維持しているかどうかを確認しています。

1979年、第1回目に実施されたテストにおいて検証された信頼性は、リスニングセクション0.92、リーディングセクション0.93、トータルスコア0.96

でした。1990年実施の結果ではリスニングセクション0.93、リーディングセクション0.93、トータルスコア0.96ですので、信頼性の維持が確認できます【資料1】。

信頼性に関して、「スコアの基準が一定であれば、毎回の平均点も一緒でなければおかしい」という人が時折いらっしゃいますが、スコアの基準が一定であることと毎回の平均点が一定であることは全くの別物です。平均点はそのときどきの受験者の能力が関係しますので、できる人がたくさん集まれば平均点は上がりますし、そうでない場合は下がります。このように平均点に変化があるからこそ、例えば数年前と現在の英語力比較といったことができるのです。

テストの妥当性に関しては、第1回公開テストの実施後に、Initial Validity Studyと呼ばれる一連の調査を行って、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング能力をより直接的に測定したテストの結果とTOEICテストのスコアがどの程度関連性があるのかを検証しています。TOEICリスニングスコアとスピーキングのテストの相関は0.83、TOEICリーディングスコアとライティングのテストの相関は0.83と高い数値が出ており、リスニング、リーディングのスコアからほぼ受験者のスピーキング、ライティングの能力も予測できることが確認されています。

2007年1月からはスピーキングとライティングの2つの能動的能力を直接的に測るTOEICスピーキングテスト/ライティングテスト（以下、TOEIC SWテスト）もスタートしました。

新たに開発した理由は、TOEICのリスニングスコアとスピーキング能力、リーディングスコアとラ

イティング能力の相関係数は0.83とかなり高いものではありませんが、1ではないため、個々の受験者で見るとスピーキングやライティング能力について予測どおりとはならない人が出てくることは否めません。また、英語の利用が職場や日常生活の場で拡大してきたことに伴い、スピーキングやライティング能力を直接的に、より正確に測定・評価する必要性がスコアユーザー側から高まってきたことや、テクノロジーの進歩などが契機となりました。

TOEICスコアがさまざまな場面で活用されるようになってくると、受験者やテストユーザーから、テストスコアだけでなく、「500点、600点取得者はそれぞれ英語でどんなことができるのか、600点取得者は500点取得者よりも具体的にどういった点で優れているのか」というような、それぞれのスコアが意味する具体的英語能力を提示してほしいという強い要望がありました。そこで、ETSではこうした英語能力を記述するためにCan-Do Studyなど、各種リサーチを行い、結果をさまざまな形で公表しています。

**偏ったサンプルによるリサーチでは正しい結果が導き出せない**

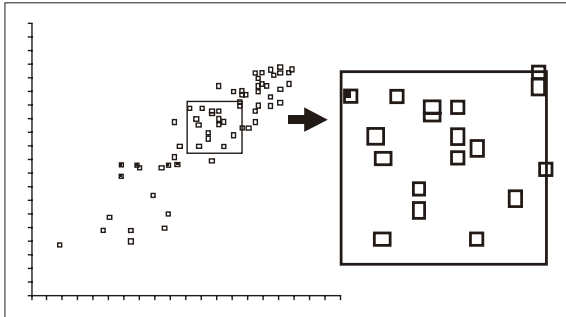
ETSが実施するテストはすべて、信頼性や妥当性、公平性等を検証したりリサーチ結果に基づいています。一方、TOEICテストに関連したりリサーチを独自に行う人たちも近年多く見られます。それらの中には、ETSが公表しているものとは異なるリサーチ結果が出ているケースや、TOEICテストの信頼性や妥当性に疑問を呈するような結論で締めくくっているようなものもあるようです。なぜ、そのような事態が起こるのかについて考えてみたいと思います。

近年、英語教育に関するリサーチにおいても統計分析が主流となっており、統計分析による有意性が認められないものは信憑性が弱いというような風潮になっております。ただし統計分析の結果が一般化できるためには重要な前提条件があります。それは分析に用いられたデータが偏りのないランダムサンプリングによるものであることです。例えば、【資料2】のように、グラフの全体では2つのデータ間には高い相関性が認められても、四角で囲まれた部分のように限定された偏りのあるサ

**【資料1】TOEICテストの信頼性**

信頼性	1979	1990
Listening	0.92	0.93
Reading	0.93	0.93
Total	0.96	0.96
平均点	1979	1990
Listening	290	297
Reading	288	267

## 【資料2】偏りのあるサンプルの例



サンプルでは、同じリサーチを行ったとしても、2つのデータ間に相関性があるとはいえなくなってしまう。特に同じ学校・クラスの生徒のみといった均質なサンプルで行われた場合は、ランダムサンプルとは大きく異なった統計分析の結果が出る可能性が高くなります。ETSが実施するリサーチでは、大量のランダムサンプリングによるデータを集め、常に資料中の左図のような状況で分析・判断が行われます。それに対し、個人レベルで行われるリサーチはどうしても右図に近いような状況でのリサーチとなってしまいますので注意が必要です。

また実例として、「TOEICテストと某スピーキングテストの相関係数が0.4であるからTOEICテストではスピーキング能力は測れない」と結論づけているものがあつたのですが、2つのテストスコア間の相関係数値が低い場合に、その原因を一方に押し付けることには問題があります。相関係数とは2つのデータの変化の様子の関連性を表すものであり、そこに規則性が認められない場合、可能性としてその原因は2つのデータ双方に同等にあるとまずは考える必要があります。さらに、ここでいえることは、2つのテストスコア間の相関性についてであり、TOEICテストとスピーキング能力の関連性ではありません。TOEICテストではスピーキング能力は測れないと結論づけるには、前提としてここで用いられたスピーキングテストのスコアが受験者のスピーキング能力を完璧に反映している試験であること、つまりテストとしての妥当性が高く、信頼性係数値も1もしくは限りなく1に近いといったことがあらかじめ検証されている必要があります。

以上のように、集められたサンプルや個々のデータの信頼性といったことを考えないと、リサーチ結

果は本質からずれていくことがあり得ることをご理解いただけたかと思います。

大学でよく行われるリサーチとして、コースの前後でTOEICテストを2回受験させ、カリキュラムの効果測定を行うというものがあります。そこでしばしば問題となるのが、学習効果がスコアに反映されないというものです。結果を基に、カリキュラムには効果がないとか、TOEICテストは大学生の学習効果測定には適していないといった判断がなされるケースもあるようです。

この種のリサーチを行う上で留意すべきことは、学習した内容とTOEICのテスト内容が合っているかという点です。英語能力の範囲は広く多岐にわたるものであり、TOEICテストが測定しているのはその一部です。学習した内容がTOEICテストが測定する内容と合っていなければスコアアップにはつながりません。また、大学では約2カ月の夏休み期間がありますので、この授業中断期間にどの程度英語を勉強したか、どのくらい7月時点の能力が維持されているのかを考慮して結果を見ることも必要です。

また分析時において、平均点だけで判断するのは危険です。仮に平均点が20点の上昇だったとしても、全員が均等に20点ずつ伸びたわけではなく、50点、100点と上がっている人もいれば、逆にほとんど伸びていない人もいます。それらを含めた結果の見方をすることが大切です。

TOEICテストを有効に活用するには、まずよく知り理解することです。知るべきことは、TOEICテストについてだけでなく、自校の学生や教育内容も含まれます。それらをすべて正しく理解して初めて、その大学における最もふさわしいTOEICテストの活用方法が見えてきます。

その知るための方法として、各校で独自のリサーチ、調査をしていただきたいと思います。重要なことは、目的に合ったデータ収集を行うことです。適切なデータが集まったならば、次にそのデータを正しい方法で分析することにより正しい結果を得ることができます。そして状況を改善する適切な対処方法を考えるためのもともになります。こういった情報を入手し、その後の適切な対処のためにも、ひいては自校におけるTOEICテストの適切な活用方法発見のためにも、大学ごとの個別リサーチを実施いただければと思います。

## 第3回全国高等学校英語スピーチコンテストが 開催されました

全国英語教育研究団体連合会（全英連）が主催する、第3回全国高等学校英語スピーチコンテストが、去る2月7日に開催されました。同コンテストには（財）国際ビジネスコミュニケーション協会が協賛しています。

当日は、都道府県大会、ブロック大会（全国9地区）を経て選出された18人の生徒が、日ごろの英語学習の成果を生かした素晴らしいスピーチを繰り広げ、大変熱気にあふれたコンテストになりました。

全英連会長の大平一男先生（東京都立両国高等学校・附属中学校校長）と開催に携わってこられた全英連第2事業部長の北見英二先生（東京都立富士高等学校教諭）は同コンテストについて次のように話します。

「うれしいことに参加者のレベルは年々上がっています。スピーチでは、単に話せばいいわけではなく、背景にある文化や歴史を理解した上で自分の考えを伝えられるコミュニケーション力が求められます。そうした理解を深め、表現力を高めていってほしいと思います」（大平会長）

「スピーチコンテストでは、参加に向けた準備過程を通して英語による論理展開、発表の仕方などが身につきます。また英語が上達するだけでなく、他

の生徒のスピーチを聞くことで視野が広がるなど良い刺激になるという利点もあります」（北見先生）

同コンテストは毎年1回実施され、ブロック大会は例年10月頃より各地区で行われます。詳細は全英連ホームページ（<http://www.zen-ei-ren.com>）をご参照ください。



大平一男会長

## 2010年度 TOEIC® エッセイコンテストを 開催いたします

（財）国際ビジネスコミュニケーション協会では、TOEICテスト30周年を記念し開催されたTOEICエッセイコンテストを、昨年度に引き続き、今年度も実施いたします。

テーマは『伝えたい、私の異文化体験』。対象は、日本の国公私立高等学校、高等専門学校（1～3年）および中等教育学校（4～6年）の在籍学生で、学校単位の応募となります（1校あたり2作品まで）。

応募は公式ホームページから、締切は2010年9月15日17時（音声データ送付は9月17日（必着））です。

詳細は、下記ホームページをご覧ください。

<http://www.toeic.or.jp/essay/>

■お問合せ:

（財）国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEICエッセイコンテスト事務局  
TEL: 03-3581-4761（土・日・祝日を除く10:00～17:00）  
FAX: 03-3581-9801

## 企業・団体・学校のご担当者様向けサイトをオープンいたしました。

この度、公式ホームページ内に企業・団体・学校のご担当者様向けサイトを開設いたしました。同サイトでは、導入を検討中の方向けに団体内での各テスト実施要領、資料・事例・データ、よくある質問等を掲載しているほか、既にご活用いただいている方向けにイベント等の情報をご提供するページもご用意しました。ぜひご利用ください。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

<http://www.toEIC.or.jp/corpo/>



## 公式ホームページにて音声学習コンテンツ English Upgrader を配信中

学習サポートサイトTOEIC Squareでは、楽しみながら英語学習ができるPodcast番組「TOEIC presents English Upgrader」を配信中です。ビジネスや日常などさまざまなシチュエーションで使われる会話表現が学べる音声素材のほか、スクリプトも掲載しておりますので、ぜひご利用ください。

詳しくは下記ホームページをご覧ください。

<http://www.toEIC.or.jp/square/basic/podcast/>



**編集室より** ◆入学試験（推薦入試、AO入試を含む）および単位認定でのTOEICスコア所持者への優遇措置をまとめた『TOEICテスト 入学試験・単位認定における活用状況2009』が完成いたしました。2009年10・11月に行われた今回の調査では、単位認定での活用校数は、大学314校、短期大学66校、高等専門学校44校となっております。本資料は、TOEICテスト公式ホームページ (<http://www.toEIC.or.jp/toEIC/>) の「公式データ・資料」にてご紹介しておりますので、ぜひご利用ください。

◆グローバルな舞台での活躍を目指す方々に向け年4回配信しているWeb情報誌『GLOBAL MANAGER』第41号が6月8日にアップロードされました。今回の特集は「いまこそ“日本”に活路を見出す」と題し、日本発の文化や技術を活かしてグローバルに活躍する企業・個人にスポットライトを当てています。他にも、「グローバル人材養成講座」「英文メール強化塾」など、ビジネスパフォーマンス向上に役立つ情報が満載の『GLOBAL MANAGER』をぜひご覧ください。 <http://webmagazine-globalmanager.com/>

発行：財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

東京業務センター 〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル  
TEL (03) 5521-6033  
FAX (03) 3581-4783  
大阪業務センター 〒541-0059 大阪府中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル  
TEL (06) 6258-0224

公式ホームページ  
<http://www.toEIC.or.jp>

公式携帯サイト「TOEICモバイル」  
<http://m.toEIC.or.jp>

